

2015年12月17～18日、2016年1月21～22日 2開催

株式会社ベネッセコーポレーション「シニア認定者研修 in 直島」

////////////////////////////////////



◆ 概要

本研修は、株式会社ベネッセコーポレーションの新任シニア認定者を対象に行われた、2日間のプログラムである。目的は「会社におけるシニアの役割・位置づけと今求められていることを理解し、ベネッセの理念・価値観の根幹にある部分を再確認するとともに、新しい価値を生み出していくための物の見方や自分ごととして積極的に取り組むためのマインドと活力を高める」であった。

当日は本センターの福のり子、伊達隆洋、岡崎大輔が参加し、初日は「みる／ベネッセとアート」2日目は「きく・つなぐ」をコンセプトに、レクチャーとワークショップ、直島に展示されている作品の鑑賞を行った。以下に、参加者が研修で得た気づきや思いを新たにしたり、実行しようと考えたことなど、受講後の声を紹介する。

◆ 参加者の声

- * アートを通じて人とのコミュニケーションがあそこまで発展するとは想像以上だった。
- * 自分だけではなく、一緒に仕事をする仲間の価値観・考え方を大切にし、お客さまの課題に寄り添うことが必要で、その中で新たなサービスを生み出せると考えました。時間がない中で、難しい側面もありますが、そこを徹底しないと変わらないと感じます。今後は改めて、共に働くメンバー（社内・外問わず）の力を引き出すコミュニケーションを心がけます。
- * 他者との対話を通じて、自分の考えを磨き上げることができるという気づき。そこから、これまでの成果についても、自分一人で成し得たわけではなく、先輩、後輩問わず周囲の力添えがあったからということの再認識と感謝の念。今後もその思いを持ち続け、他者にも伝え続けることの決意。
- * 対話というキーワードが私の中では強く印象に残っており、否定意見や自分の主張をしゃべるのではなく、他人の意見や思い(想い)をきちんと理解しながら、相手とともに作り上げていくことを心掛けていきたいと思えます。

- * 「コミュニケーションに力を抜かない」「できるだけ自分のことばで確認する」まずはここを肝に銘じて行動していこうと思います。
- * 正解は一つでないという前提、多様な意見を受け入れる環境づくりが、結果として「こう言わなくてはいけない」と言った優等生的な模範解答が求められてしまう予定調和的な研修に留まることなく、各人の内から沸き起こる気づきや学びを研修の成果としているところがとてもよかったです。
- * この研修から得た気づきはさまざまですが、自分は、他者とのコミュニケーションの際に意識するのはもちろんですが、思考する際の思考の仕方として実践していきたいと思いました。具体的には「知っている気にならない」ということです。そこで思考を止めていたということに気づきました。また、ロジカルになりすぎないということも大きな気づきでした。シンプルに、端的に、スピーディーに、だけでは見落としてしまうことがあまりにも多いことに驚きました。
- * 今回の研修は私がこれまで受けてきた研修の中で、ベストな研修でした。「なぜアートがよく生きるかがわかった！」とセクションで伝えたところ、ぜひメンバーにも研修してほしいと言われました。全く同じようには伝えられないとは思いますが、今回学んだことをメンバーにも共有していきたいと思っています。

上記に加え、ACOP の企業内人材育成プログラムとしての名称案を以下に紹介する。これは、同社人材開発部のご好意で、参加者に募ってくださったものである。「ACOP が持つパワフルな研修効果を、よりの確に表現できるタイトルを考案されてはどうか？」という、たいへん光栄なご提案であった。

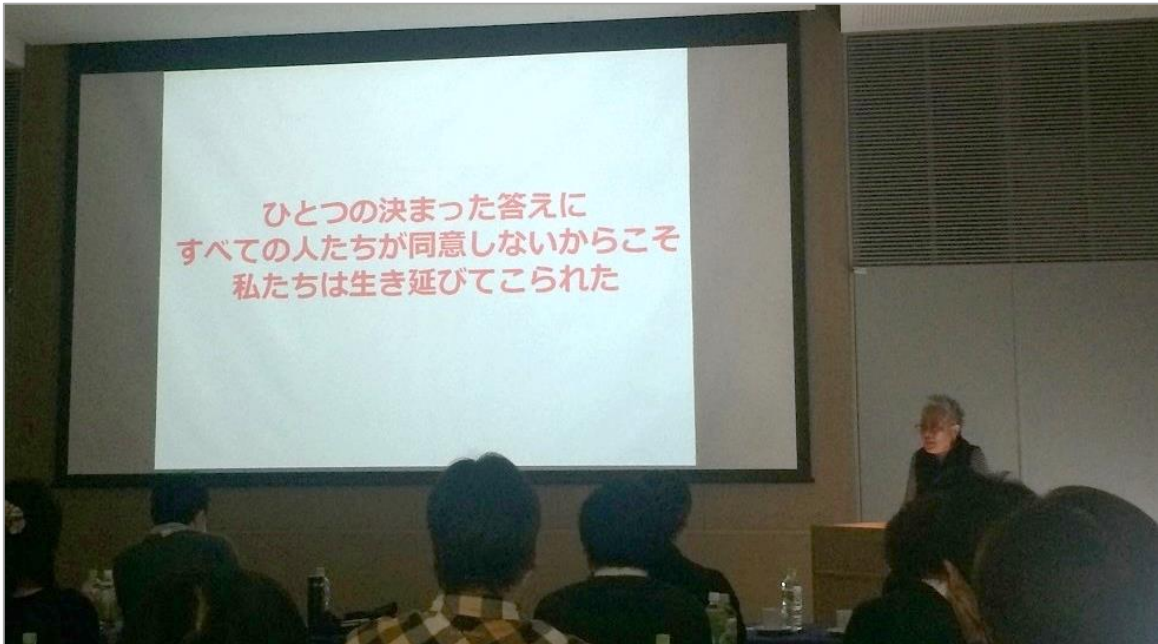
◆ 対話型鑑賞プログラム ACOP を言い換えると？

- * 「モノの先にあるコトが見えてくる思考型鑑賞」
 - 作品を通して、その先の問いや、自己を見つめる手法だと思いました。
- * 「メッセージ感受型鑑賞」
 - 読解するわけではなく、答えがないものを個人個人で感じ取るため。
- * 「停歩思考法」
 - 世の中の動きが早すぎて走りながら思考するような状況ですが、時には美術作品をゆっくり鑑賞するように、(いい意味で)歩みを止めて、少し立ち止まって思考するような余裕・姿勢が必要だと研修を通して感じましたし、ACOP はそれを可能とする手法だと理解しました。
- * 「発見型鑑賞」「価値創造型鑑賞」
 - 見る・聞く・話す・考えるといった行動を通して自分で価値を発見していく作業だと思ったので。また、そこで見つける価値は、自分自身(他者との意見交換からも)のなかから創造するものだと思います。
- * 「アートを活用した知の共創 Project」「アートを活用した価値共創 Project」
 - 芸術に関心が薄い人に向けて、いわゆる芸術鑑賞的な要素は薄めに。参加者が新しい、学びや気づき(もしくは付加価値)を共に創り上げる活動。
- * 「『みる』『きく』を通した学び—他者とのコミュニケーションの深化」
 - 視覚と聴覚を使った学びであることと、やはりコミュニケーションを深めることと思うのでちょっと長いのですが、これかなと思いました。

◆ 講師所感

同社の理念・価値観のひとつである「在るものを活かし、無いものを創る」。参加者は今回の研修で、一緒に仕事をする他者の存在が、自分の能力向上や仕事の成果をもたらす、さらに、事業で新たなサービスを生み出すきっかけとなっていたことに気づいてくださった。今まではみえていなかった他者という名の「在るもの」を、自己や他者との対話を通じて見出したのである。

ひとつの答えに縛られて討論すると対立や葛藤を招き、そこからは新たな可能性や価値は生じない。新たな答えを「相手とともに作り上げること」に目を向けてこそ、新たな価値が生み出されるのだ。つまり、多様な他者の意見を「在るもの」として見出し、それらを活かして今までに「無いもの」を創るのだ。



研修の最後に福は「発明とは、ゼロから作ること。発見とは、これまでも存在していたのに気付かなかったことを、認識すること」であると伝えた。自分のまわりに存在している物事を、あらためて意識を持ってみて、「発見」することを続けていただきたい。

(文責 京都造形芸術大学 アート・コミュニケーション研究センター 岡崎 大輔)